絵本にあらわれる男性像と女性像

加賀原由佳
（黒木雅子ゼミ）

1．はじめに

筆者が絵本に魅せられるきっかけになった作品のひとつが，酒井駒子の『よるくま』である。ある夜，主人公の男の子のもとに，胸に三日月の模様を持つくまの子ども「よるくま」がやってくる。「よるくまちゃんは　どうして　そんな　よなかに　きたの？　よるくまだから　よるあそぶの？」と男の子が尋ねると，よるくまは母親を捜しに来たと言い，泣き出してしまう。男の子とよるくまは一緒に母親を捜しに行くことになり，よく行くお店や公園，よるくまの家などを見て回る。あちこち探し回ってやっと，魚を釣る「おしごと」をしていた母親のもとに辿り着くと，よるくまは泣きながら母親に飛びつく。2人は母親に抱えられて帰宅し，幸せな表情を浮かべながら仲良く夢の中へ…。「子どもから大人まで心をとらえて離さない物語と，静ひつさをたずさえた芳醇で美しい絵」と評される酒井の描く愛らしい世界に筆者も心を捉えられ，彼女の本をはじめ，さまざまな作家の絵本を手に取るようになった。

同じく酒井の『ぼく　おかあさんのこと…』も愛らしい作品である。うさぎの男の子の話し言葉がテキストとなり，母親に対する不満を打ち明ける形で物語が進行する。しかしその内容は，「ぼく　おかあさんのこと…　キライ。（中略）それから　ぼくとは　ケッコン　できないっていうし。（中略）ぼくは　おかあさん　としか　けっこんしたくないのに。　だから　キライ」と，不平を言うのは口先だけで，本当は母親が好きでたまらないことは誰が見ても明らかである。不満を募らせたうさぎの子は家出を試みるが，忘れ物をしたと言い，すぐ家に戻ってくる。そして「ぼくとまたあえて　うれしい？」と母親に問う。「うれしいとも！」と答えた母親の胸に飛び込むうさぎの子の顔は，幸せに満ちている。

2冊の絵本を紹介したが，どこか似通った印象を受けないだろうか。これらの作品には，いくつかの共通点が存在している。

(1)　主人公が幼い男の子であること。
(2)　父親が登場しないこと。偶然に描かれなかったというより，家庭において存在感がない。
(3)　主人公は母親を深く愛しており，母親の愛を実感することで安心感を得ること。

これらの特徴は酒井の作品に限らず，多くの絵本で1つ以上当てはまる場合が多い。つまり男の子（父親）と女の子（母親）では，描かれ方が偏っていたり，役割が異なったりするのである。

絵本は読書の出発点であり，人生において初めて出会う本である。近年では絵本に出会う時期の低年齢化が著しいといわれ，0歳児からを対象にした絵本やブックリストも次々と出版されている。文字もまだ読めない乳児に，絵本を選択し，与えてやるのは大人である。子どもが主体的に絵本を選択し，自ら読み進めるようになるまで，絵本と子どもの間には必ず大人が介在する。もとより，絵本は作家・画家・翻訳家・編集者等の大人たちによって制作され，書店員や図書館員という大人を介して手渡されるため，多くの大人の価値観が付加される。

また，子どもに与える本を選び，読んでやるのも，親や保育者等の身近な大人である。大人が介在すること，読み手を必要とし，気に入った本は何度も繰り返し読むという特性を持っていることから，絵本というメディアは，受け手である子どもが主人公を理想像や基準のめやすとして受け取る可能性が高いと指摘されている。また，与えられたジェンダー・イメージが強化・蓄積される可能性が高いともいわれている（武田　2006）。

絵本に描かれる男の子（父親）あるいは女の子（母親）が，無個性的で型にはまった「男らしさ（あるいは父親らしさ）」や「女らしさ（あるいは

母親らしさ)」でしか描かれていなければ，偏ったイメージが子どもたちに蓄積されていくだろう。しかし残念ながら，現在子どもたちに読まれている絵本の多くは，性別役割意識にとらわれているものが多いように感じる。本稿では，男の子（父親）あるいは女の子（母親）の描かれ方や役割にはどのような差異があり，どれほど異なるのかを明らかにし，どのような価値観が絵本を通して伝えられているのか，現状を把握することを第一の目的としたい。また，現在読まれている本の中でも登場人物の個性が光る素敵な本がある。これらを紹介し，絵本を子どもに与える際の選択肢に加えてもらうことを第二の目的とし，本稿を進めて行きたい。

2．性別によって異なる主人公の描かれ方

筆者が「主人公が幼い男の子である」と指摘した通り，絵本には男性主人公が活躍するものが数多くある。高槻市での調査「絵本100冊読んで見えてきたもの」では，主人公の性別内訳は男性66%，女性18%，不明16%という結果が示されている（特定非営利活動法人シーン　2003)。子ども向けマス・メディアを対象にした調査でも，絵本の主人公は男性69.7%，女性21.2%，不明9.1%で，どちらの調査でもおよそ男性7割，女性2割，不明1割という結果が出ている（藤田　2003)。物語の中心人物として描かれる性別は，多くの場合男性なのである。

数量だけでなく，主人公の性格や行動，テーマなどにも，性別によって異なる特徴が見られる。「男の子は動的で個性的，女の子は静的でロボット的」であり，「男の子は個性も多様なら，行動の種類も多様で，社会性をもち，空間的にもひろがりをもつのにくらべると，女の子のほうは，総じて静的で，ムード的表現の手段，行為者としてよりも傍観者，見物人，男の子の行為の受け手に使われることが多く，家事の手伝い（おつかい，子守り，料理)，ひとり遊び，あるいは脇役に助けられ保護されて行動するといったストーリーが驚くほどに多い」といわれている（藤枝　1983)。

例として挙げられている作品が，『あめのひのおるすばん』である。主人公は幼い女の子で，一人で留守番をしながら母親の帰宅を心待ちにしている。女の子は，寂しさを紛らわそうと小さなピアノを鳴らし，突然鳴り出した電話に怯えてカーテンに隠れ，結露した窓に指で願いごとを書く。文にも絵にも表されていないが，母親に早く帰ってきてほしいという思いが「わたしの　おねがい」だと容易に想像できる。母親が帰ってきた場面は明るい色で描かれ，女の子の安心感が伝わってくる。『はじめてのおるすばん』も，幼い女の子が母親の帰宅を待つ物語である。主人公のみほちゃんは，母親に留守番を頼まれ「うん，できるよ」と返事をするが，母親が外出するとすぐに「まま，はやく　かえってきて」とくまのぬいぐるみを抱きしめる。郵便屋さん，新聞の集金屋さんが尋ねてきてもうまく応対できず，「こんど　だれかきたら，どうしよう……」と泣きそうになったとき，母親が帰宅し，とたんにみほちゃんは明るさを取り戻す。どちらの作品も，主人公の不安は母親の帰宅によってのみ取り除かれ，主体的な行動による問題解決は見られない。

男の子の主人公である作品には，どのようなものがあるだろうか。藤枝が「絵本の名作，傑作，古典とされるもの，あるいは子どもたちのあいだで根強い人気があるものを，思いつくままにひろってみ」たという作品として，野ねずみの男の子が大きな卵で大きなカステラを作る『ぐりとぐら』，やんちゃな男の子マックスが怪獣たちの王様になる『かいじゅうたちのいるところ』等，多くのタイトルが列挙されている。男の子の主人公は，数が多いだけでなく，テーマや役割も多種多様で，個性的に描かれている。活動範囲は広く，家の中でじっとしておらず，いきいきと外の世界に飛び出している。

シーンの調査では，性別による人物像やテーマ等の内訳もまとめられているが，マックスのように豊かな想像力のもと活発に動きまわる主人公は，圧倒的に男の子が多いという結果が出ている。競争心をテーマとした作品は男の子が主人公の場合にしか見られず，好奇心旺盛な主人公も男の子に多い。これに対して，女の子の主人公は世話役にまわることが多い。また，自己主張をテーマとした作品は女の子が主人公の場合に多く見られた。これについては，「普段自己主張を控えめにとされている女の子だからこそ，あえてテーマとなる

のかもしれない」という考察がなされている。

性別による主人公の描かれ方は，数量的にも質的にも大きく異なることが筆者の調査や先行研究によって明らかになった。これらのデータは，子どもたちが日常生活の中で親しんでいる絵本という文化財もまた「隠れたカリキュラム（言明されることなく潜在的なレベルで伝達されるカリキュラム）」であることを示し，現代社会が作りあげた性別役割意識の再生産につながるといわれている（佐々木　2003）。絵本の与え手である大人によって，知らず知らずのうちに，子どもたちの可能性が狭められているのではないだろうか。

3．主人公とは異なる親の描かれ方

主人公は圧倒的に男性（男の子）の登場が多いが，その親に目を向けると，その割合は逆転する。2章でも紹介した藤田の調査では，大人キャラクターは比較的女性が多く，子どもキャラクターは男性が多い傾向であるという結果がまとめられている。絵本に登場する大人キャラクターの多くは，主人公の家族であると考えられる。女性の大人キャラクターが多いとは，すなわち母親が多く登場すると言い換えられるだろう。シーンの調査でも，100冊中に45人の親（両親が両方とも登場する場合は，両方にカウントを入れている）が登場し，内訳は母親が18人（64％），父親が10人（36％）で，母親が登場する物語が多かった。

この結果に興味を持ち，筆者は「絵本に描かれる母親像・父親像～『第23回　よい絵本』から分析する～」と題して調査を行った（加賀原　2008）。全国学校図書館協議会が発行するブックリスト『よい絵本』のうち，調査当時の最新版であった『第23回　よい絵本』（2005）に掲載された189冊（掲載総数は211冊だが，《知識の絵本》22冊は除いた）の文と絵それぞれを分析した。文の調査では，母親あるいは父親を示す語が１語登場するごとに1カウントし，母親のカウント数が多ければその絵本を「母中心」，父親が多ければ「父中心」，同数であれば「両親」と分類し，集計を行った。親が登場しないものを省くと98冊となり，うち「母中心」は64冊（65.3％），「父中心」は26冊（26.5％），「両親」は８冊（8.2％）であった。絵の調査でも，母親あるいは父親が１回登場するごとに１カウントした。母親のカウント数が多ければその絵本を「母中心」，父親が多ければ「父中心」，同数であれば「両親」と分類し，集計を行った。親が登場しないものを省くと115冊となり，「母中心」は75冊（65.2％），「父中心」は25冊（21.7％），「両親」は15冊（13.0％）であった。文と絵の両方で，両親が一緒に描かれるよりいずれかの親が重点的に描かれることが多く，約３分の２の絵本では母親が中心となっていることが分かった。男性優位の傾向が見られた主人公とは，性別の逆転が見られた。

また，調査を通してまとまった数の絵本を読み込むうちに，「父中心」絵本には脇役として母親が登場することが多いが，「母中心」絵本は母親と子どものみが登場する場合が多いことを見いだした。父親が登場しない物語，父親の気配すら感じない家庭が平然と描かれているのである。冒頭で紹介した２つの作品の特徴のひとつとして，筆者は父親が登場しないことを挙げたが，「酒井駒子の作品には，父の影がない」という指摘は既にされている（神戸　2007）。「家族のあり方が様々に変化している現実が絵本の中に反映している」と神戸が言うように，絵本は現実を映し出す鏡である。絵本において父親の存在感が薄く，母親と子どもの結びつきが強いということは，現代社会の家族関係が映し出されているゆえだろう。

絵本における父親・母親の違いは，存在感だけではない。人物像も性別により大きく異なり，かつ類型的な描かれ方をしている。名作や古典といわれ，子どもたちに人気がある絵本に登場する親には，「母親といえばエプロンがけ，することといえば，料理，洗濯，掃除，買物，子どもの世話などで，家庭的役割以外の姿が描かれることはめったにない。父親をあらわすものは，煙草，パイプ，新聞，車，それにソファやロッキングチェアなど」という特徴がある（藤枝　1983）。昔話から最近の作品まで48冊を選んだ調査でも，「絵本の中での家庭内の母親は，エプロン姿でいつも明るく家事をこなし，父親はあまり登場しない。父母の職業については，多様であるが，父親の多くは外で働いている。母親の多くは専業主婦である」という特徴がある（黒田　1997）。どちらの考察でも，母親はエプロン姿であることが指摘されている。

専業主婦として家事や育児をこなし，子どもと長時間を共にするのが典型的な母親像であるようだ。父親については，藤枝は家庭内での特徴，黒田は家庭外での特徴について触れている。外で働いているためあまり家にいないが，家庭にいるときも家事や育児にはほとんど手を出さずにどっしりと腰を下ろし，煙草を噴かしているのが典型的な父親像といえるようだ。

筆者も，『第23回　よい絵本』掲載絵本に登場する父親・母親それぞれの特徴をまとめたところ，ほぼ同じ結果を得た。家事をする母親はやはり多く描かれており，子どもを抱きしめる，衣服を作ってくれる等の特徴も見られた。父親も，家庭外で仕事をしている場合が多く，あこがれの対象になり，威厳ある態度をとる等の特徴も見られた。また，「母中心」絵本においては，父親の存在感がなく，存在しても一切描かれない場合が多かった。例えば『天使のかいかた』では，主人公が天使に「あたしは，さちです。おとうさんと，おかあさんと，三人ぐらしです」と自己紹介するが，父親はその後の物語において一切登場しない。しかし「父中心」絵本では，威厳ある父親から数歩下がったところに控え目に母親が描かれているなど，母親が描かれない作品はほとんどなかった。

また，物語とは直接関係のない部分に，母親と子どもの組み合わせがじつに多く描かれていることにも驚く。子どもを抱いた電車・バスの乗客，保育園の送迎をする人，乳母車を押して散歩する通行人等，描き込まれた人物に着目すると，それが女性である場合がきわめて多い。子どもにとって身近で，深いつながりを持つ親が，現状において母親であるゆえの結果だろう。日常生活レベルでの，父子の結びつきの弱さが露呈された。

その反面，職業などで個性を発揮する母親はきわめて少ない。筆者の調査では，職業を持ちいきいきと働く母親が登場する作品は『メアリー・スミス』しか該当しなかった。主人公メアリー・スミスは1児の母であると同時に，朝早く起きなければならない人を起こしていく「めざまし屋」で，町の人の役に立ち，社会的責任を果たしている。また，専業主婦であるが，『せとうちたいこさんデパートいきタイ』の主人公として活躍する鯛の奥さん「せとうちたいこさん」も個性的なキャラクターである。海に暮らす魚であるにも関わらず，「タイだって　いちど　デパートに　いきたーい」と人間のデパートに出掛けていく，家庭外で新しいことに挑戦しようとするせとうちたいこさんも印象に残る母親である。

職業を持つ母親を見つけることと同じくらい，家事・育児に関わる父親を見つけることは容易ではない。子どもの送迎を役割とする父親が登場する作品は数冊見られたが，国外の作品のみであったことが残念であった。日本の絵本の中に描かれる父親については，「家族としての『ちょい役』は沢山あるのですが，子どもとしっかり関わり存在感のある父親がとても少ないのです。日曜日や祝日のお出かけ専門やお留守番御用達の父親の存在はあるものの，ごく普通の日常生活の中にしっかり根を下ろし，子どもの発達とともに成長する父を描いたものが少ない」とも言われている（佐々木　2001）。

『第23回　よい絵本』の調査では，数量的な差異を中心に調査・分析を行ったが，本章にまとめたように性別によってまったく異なる親像を見いだし，質的な違い，特に子どもとの関わり方の違いをより深く追求してみたいと考えた。そのため，本稿執筆にあたり，父親・母親はそれぞれ子どもにとってどのような存在であるか，子どもに対してどのような態度をとるかといった質的な内容分析を中心にした調査を改めて行うことにした。調査方法・結果などは4章にまとめた。

4．幼児向け絵本に描かれる父母の人物像

調査を行うにあたって最も苦慮したのは，対象とする絵本の選定である。現代の子どもたちにとって身近な絵本を選びたいと思ったが，絵本は長く愛され，読み継がれるものが多くあるため，出版年が新しいものほどよく読まれるというわけではない。最も売れている絵本が最も読まれている絵本である，と断定することもできない。販売数の多い絵本は，もちろんよく読まれているには違いないが，子ども時代の筆者しかり，図書館等から借りた絵本が読書の中心となる家庭もあるだろう。また，「よく売れている本」と「よく借りられている本」はほとんどの場合一致しない。例えば，書店でよく売れる子どもの本はアニメキャラクター

が登場するものと聞くが，図書館では所蔵していない場合が多い。親が子ども時代に読んでいたものがそのまま子に手渡される場合もあるだろうし，保育園や幼稚園に行けば，園にある絵本を手に取ることや，保育士に読み聞かせてもらう機会もあるだろう。図書館や児童館等で催されるお話し会でも，多くの親子が参加し，絵本に見入っている姿を見かける。そのため，「よく読まれている本」をどのように定義するべきか，答えを出すことができなかった。

そこで，絵本や子どもに携わる職業に就いている人，絵本を研究する人など，専門家によって作成されたブックリストの力を借りることにした。良書・おすすめ絵本のリストや目録はいくつもの出版社や図書館等から発行されているが，選定基準が明記されている点，絵本の研究を専門とし，かつ営利を目的としない団体により出版されて全国に流通している点，比較的新しく，近年に刊行された絵本も含まれている点から，全国学校図書館協議会編『第24回　よい絵本』(2008)，日本子どもの本研究会絵本研究部編『えほん　子どものための500冊』(1989)，続編である『えほん　子どものための300冊』(2004) の３冊を選んだ。なお，本調査では幼児向け，あるいは乳幼児向けとされた絵本のみを対象とした。乳幼児向けのみを対象とした理由は，絵本の受け手が，主体的に絵本を選択し，自ら読み進めるようになる前段階である場合が多いと考えられるからである。大人の意思に基づいて選択され，子どもに与えられている絵本はどのようなものなのかを調査したいと思ったからである。

延べ301冊の絵本が抽出されたが，以下(1)～(3)の基準を設けて選別したところ，うち80冊・81作品が分析対象として残った。81作品となったのは，『おかあさんだいすき』には主人公の異なる２作品が収録されており，それぞれを別の作品として扱ったためである。

(1) 主人公が特定できる作品に限る（ただし，主人公は複数いてもよい）
(2) 原則として主人公が人間である作品に限る。ただし動物やそれ以外のものであっても，擬人化されていればよい（家に住む，衣服を着るなど人間らしい生活を営んでいることを指す。人間の言葉を話すだけではだめ）
(3) 育ての親が「父親」あるいは「母親」と呼べない場合は省く（例えば，祖父母が育ての親である場合など）

調査にあたっては，射水市大島絵本館および富山県内の公立図書館の蔵書，筆者が自宅に所有する絵本を用いた。調査期間は2008年10～12月で，調査には筆者のみが携わった。対象絵本を閲覧しながら，Excelファイルに父親及び母親の登場の有無，登場する親の特徴や行動などのキーワード，書誌情報を入力していく形で調査を進めた。対象絵本すべての入力が完了したところで，似通ったテーマやキーワードを持つ絵本をグループ分けし，その特徴を下記のようにまとめた。

読みづらいと思う方もいるだろうが，作品の表現を尊重するため，引用箇所は空白も含めてそのまま掲載した。改行部分も空白を１マス挿入することで表現した。

１）母親と子どもたち

息子をどこまでも愛する母親

『どれがぼくかわかる？』の裏表紙には，「子どもにとって，母親の愛ほど絶対的なものはありません。この絵本は，母親とのふとした対話の中にさえ，自分への母の愛を見つけだそうとする子どもの姿を，愛らしくみごとに描きだしています。アメリカの傑作絵本です」という解説がされている。「子ども」と一般化されているが，母親の愛を確かめようとする姿は特に男の子に見られるように思う。主人公ウィリアムも例に漏れず，想像の世界で馬の群れに混ざり，「もしも　ぼくが　○○に　なったら，どれが　ぼくか　わかる？」と，母親に質問する。母親は，他の馬にはないウィリアムの特徴を見分けて，「ウィリアム，おかあさんには　わかるわ。○○は　あなただけなんですもの」と言い当てる。ウィリアムは，スカンクや○○などに次々と化けるが，母親は必ず見つけ出す。満足したウィリアムは「もとの　ウィリアム」に戻り，母親の作ったパイを食べ，愛されていることを実感して満足するのである。

『ぼくにげちゃうよ』でも，家を出てみたいと思った子うさぎの男の子が想像を膨らませ，母親のもとを離れる作戦を次々と考え出す。「かあさ

んが　おいかけてきたら，ぼくは，おがわの　さかなになって，　およいでいっちゃうよ」と子うさぎが言うと，母うさぎは「おまえが　おがわの　さかなになるのなら，かあさんは　りょうしになって，おまえを　つりあげますよ」と答える。同様のやりとりが何度も繰り返された後，「ぼくは　にんげんのこどもになって，おうちのなかに　にげちゃうよ」と子うさぎが言うと，母うさぎは「おまえが　にんげんのこどもになって，おうちに　にげこんだら，　わたしは，おかあさんになって，そのこを　つかまえて　だきしめますよ」と答える。これを聞いた子うさぎは，「うちにいて，かあさんのこどもで　いるのと　おんなじ」と悟り，逃げ出すのをやめてしまう。外の世界を見たいという子どもの好奇心を，母親は摘み取ってしまったのではないか。

どちらも1970年代に日本語版が出版されているが，現在も新聞の書評で取り上げられるなど，長年にわたり支持を得続けている。あたたかい，微笑ましいやりとりととらえる人が多いからだろう。しかし筆者は，自立心を疎外するほどのあまりに深すぎる愛に，少なからず恐怖を感じてしまう。

みんなが欲しがる母親の手作り服

『ねずみくんのチョッキ』で，「いい　チョッキだね　ちょっと　きせてよ」と動物たちがこぞって着たがるねずみくんの赤いチョッキは，ねずみくんの母親が編んでくれたという記述がある。『おかあさんだいすき』に収録された作品である「おかあさんのあんでくれたぼうし」で，主人公あんでるすがかぶっている帽子も母親の手作りである。みんながあんでるすの帽子を欲しがり，自分が持つ高価なものとの交換を試みる。王様までもが王冠との交換を申し出るが，あんでるすは頑なに断り，大好きな母親が待つ家に逃げ帰る。『はけたよ　はけたよ』でも，主人公たつくんが母親に縫ってもらったパンツを見た動物たちは羨ましがるが，たつくんのパンツは欲しがらない。代わりに，「ぼくたちも，　おかあさんに　ぬってもらいたいなあ」と言うのである。

子どもたちは父親ではなく，母親の手作り品に異様なまでに執着する。また，今回の調査では，この特徴に該当する作品の主人公は男の子のみであった。

娘に留守番をさせる母親

２章でも取り上げた『あめのひのおるすばん』『はじめてのおるすばん』には，幼い娘を独り家に残して外出する母親が描かれる。どちらの作品も母親の不在による少女の不安や切ない思いが物語の中心に据えられ，母親が帰宅し，抱きしめてもらうことによって不安感は払拭される。絶対的な信頼を寄せる母親が用事を済ませる間じゅう，少女たちは絶えず帰宅を祈り続けている。

この２冊には父親が一切登場せず，同居しているかも定かではない。母親が家を空ける時間は，ほんのわずかであっても耐え難い恐怖を味わうにもかかわらず，父親の不在について子どもは何も思わないようである。

母親から娘に伝えられる技術とは

『おはいんなさいえりまきに』の主人公りっちゃんは編み物，『しろくまちゃんのほっとけーき』の主人公しろくまちゃんはホットケーキの作り方を，それぞれ母親から教わる。りっちゃんは出来上がった長いマフラーでたくさんの人を温めてあげるし，しろくまちゃんは出来上がったホットケーキをボーイフレンドのこぐまちゃんにふるまう。母親から教わった裁縫・料理の技術で，周囲の人（主に男性）を喜ばせてあげるりっちゃんとしろくまちゃん，幼い２人の女の子は，まるで小さな母親のようである。

自分の持つ技術を継承する意味での「教える」役割を持つ親は，今回の調査では母親のみだったが，子どもの疑問に答えたり，知識を与えたりする意味での「教える」役割を果たす親は，父親・母親ともに，いくつかの作品で見られた。

母親との別れ＝家族を失うこと？

『はじめてのふゆ』の主人公・ネズミのヘンリエッタは「ちいさいのに　ひとりぼっち」である。なぜなら，「おかあさんは　ヘンリエッタが　うまれたはるに　しんでしま」ったからだ。『ぞうのババール』も母親と死別し，独りぼっちになるが，人間の暮らす町で親切なおばあさんの援護を受けて賢いゾウになる。『三びきのこぶた』でも，

母ブタが貧乏に耐えられずに３匹の子ブタを手放したため，３匹の子ブタは自立を迫られることになる。

以上の３作品においては，父親については一言も触れられておらず，生死すら明らかでない。死別しているためそばにいられないのか，家庭の事情などの別の要因があるのかも分からない。なぜ父親は援護の手を差し伸べないのか，子どもたちはどうして父親のことを思い浮かべないのか，筆者は疑問に感じる。

まとめ

子どもの日常を描いた作品には，子どもの性別に関係なく，母親が登場するものが多い。しかし丁寧に読み解くと，子どもの性別によって，母親がしてくれることが異なることが分かった。これは，子どもの性別によって，母親が期待することや求めるものが異なることのあらわれだろうか。また，子どもの日常を描いた作品に母親が多いと述べたが，母親の活動範囲は主に家の中であり，出掛けても日用品の買い物や短時間で済む用事など近所にとどまる。子どもに目が届く狭い範囲でしか，母親は活動することができないようである。そして，これらの絵本には父親の気配が感じられない。まるで母親のみが親であるようで，母親がいなくなると，子どもはたちまち「ひとりぼっち」になってしまうのである。

２）父親と子どもたち

乗り物と父親

乗り物が登場する絵本では，父親と息子の交流が盛んに行われる。『でんしゃがくるよ！』に登場する父親には，毎週土曜日になると，息子と娘を伴って出掛ける場所がある。自転車の補助席に主人公の「ぼく」を乗せ，「おねえちゃん」を伴い，ゴルフ場の横や森の中を抜け，橋へと向かう。橋の下には線路が通っており，子どもたちは電車が足の下を潜り抜ける瞬間を楽しみにしている。電車が行ってしまっても，また次の電車を見るために子どもたちに付き合う父親の表情は，なんとも満足そうである。

『じどうしゃにのった』では，主人公の男の子が，父親が運転する軽トラックの助手席に乗って，自転車の配達に付き添う。母親は自転車店「ミタサイクル」の店先で見送ってくれるのみで，父と息子の交流，街で活躍するさまざまな車が中心に描かれる。

乗り物がテーマの絵本ではないが，乗り物に関わる母親が登場した唯一の作品が，『サリーのこけももつみ』であった。母親は自らが運転する自動車にサリーを乗せて，山にこけももを摘みに来る。この分析を通して気付いたが，この絵本以外で，女性が乗り物を動かす絵本を筆者は知らない。たいへん珍しい場面が描かれているのかもしれない。

父親は家庭外で活躍？

父親と娘の関係が中心に描かれた作品は，『かさ』と『うさこちゃんとうみ』の2作品のみであった。

『かさ』は文字のない絵本である。雨の日に，小さな赤い傘を差して，大きな黒い傘を抱えた女の子が町を歩いていく様子が描かれる。女の子が辿り着いたのは駅で，スーツを着た男性に黒い傘を手渡し，笑みを見せる。仕事帰りの父親に傘を届けにきたのだろう。来た道を戻る途中，女の子は父親にドーナツを買ってもらい，大きな黒い傘で相合傘をしながら仲良く帰っていく。

『うさこちゃんとうみ』は，主人公うさこちゃんと父親が２人きりで，海へ遊びに行く物語である。父親が引く荷車に乗って海にやってきたうさこちゃんは，海に入ったり，大きな砂山を作ったり，くたびれるまで父親と遊び尽くす。

この２作品の共通点は，帰途につくところで物語が終わっており，「ただいま」と家に帰る姿が描かれていないことである。父親の領域はあくまで家の外であるということだろうか。

母親は家事，父親は会社勤め

夫婦でパン屋を営む『からすのパンやさん』の母親以外に，仕事をする母親の姿は見られなかった。また，多くの作品でエプロン姿が描かれており，日中子どもと過ごす場面が多いことから，ほとんどの母親が専業主婦であると考えてよいだろう。父親の職業は，『からすのパンやさん』ではパン屋，『イエペはぼうしがだいすき』では医者，

『ぼくぼうしとらないぞ』では工事現場の監督など，さまざまであった。

職業は不明だが，『いもうとのにゅういん』，『おちゃのじかんにきたとら』等の作品では，父親はスーツを着て帰ってくる。おそらく会社に勤めているのだろう。この2作品では，物語の初めのうちは母親しか登場しない。父親は物語の中盤に帰宅し，家では子どもと一緒に食事をしたり，会話をしたりと，短時間ではあるが積極的に子どもと関わりを持っている。そのため，登場するページ数は圧倒的に母親のほうが多いが，父親も家族の一員として印象に残る。

まとめ

母親と比較すると，父親が活躍する絵本の数は多くない。特に，父親と娘の交流を描いたものはほんの一握りである。しかし父親は，自転車や自動車などの乗り物を活用して非日常の世界に子どもを連れて行き楽しませるという，母親ができないことをやってのける。また，職業を持ち，社会と関わりを持つのも父親の特徴である。そのせいか，家にいる時間は母親と比較して短かったり，家へと帰る姿が描かれなかったりすることがほとんどであった。

3）子どもからのプレゼント

母親へのプレゼント

娘から母親へのプレゼントの定番は，野に咲く花であるようだ。『ふってきました』の主人公つるこちゃんも，『ふんふんなんだかいいにおい』の主人公さっちゃんも，母親の誕生日を祝うために花を摘みに行く。決して高価なものとは言えないが，娘の優しい気持ちに触れ，贈られた母親は嬉しそうである。

息子から母親へは，『おかあさんだいすき』に収録された作品である「おかあさんのたんじょう日」で，主人公だにーが「おか　あさんの　くびに，　ぎゅっと　だきつ」くプレゼントをする。動物たちに何が良いか聞いてまわると，頬ずりしてあげるのがいちばんいい贈り物だとくまが教えてくれたからである。

父親へのプレゼント

父親にプレゼントを用意したのは，『ぼく　ぼうしとらないぞ』の主人公てっちゃん（男の子）のみで，娘から父親へプレゼントを贈る場面は，今回の調査では見られなかった。

てっちゃんは父の日に向けて父親の絵を描いていたが，「とうさん　じまんの　ひげ」がうまく描けず，とうとう自分の髪の毛を切って，鼻の下に貼り付けることで絵を完成させた。自慢の絵を手渡すと，「よっ，てつぼう　なかなか　やるじゃないか。　うーん，こ，こりゃ　かあさん　ほんものの　ひげだぞ」と父親は大喜びし，言葉や態度でてっちゃんに感謝の気持ちを伝える。てっちゃんも父親もニコニコ顔である。父親は，「よーし，　その　ゲジゲジあたま　なおしてやろう」と意気込み，てっちゃんの散髪を始めたが，「くりくりぼうず」にされてしまい，てっちゃんは激怒する。恩を仇で返されたてっちゃんにとっては笑い事ではないが，父と息子の微笑ましい出来事に思わず笑みがこぼれる作品である。

まとめ

性別による親の登場割合に比例して，父親より母親のほうが，子どもからプレゼントをもらう場面が多く描かれている。しかし，プレゼントに込められた子どもたちの親を思う気持ちに，違いはないように思われた。

4）だいすき！の絵本

おかあさんだいすき！

『だめよ，デイビッド！』は，母親の目線から，やんちゃな主人公デイビッドの姿が描かれる。散らかしたり，汚したり，騒いだり，いけないことばかりするデイビッドを「だめ！」と叱り続ける母親だが，デイビッドが失敗して落ち込むと，デイビッドを呼び寄せ，「よしよし，デイビッド…　だいすきよ！」と温かく受け入れる。それまで小憎らしい顔で描かれていたデイビッドだが，母親にやさしく抱擁されるラストシーンでは，幸せそうな表情を見せる。母親の愛情を実感し，安心感を得たからだろう。

『おはようぺろぺろ』の主人公くーくんは朝寝坊である。家族だけでなく，友達や鳩時計に起こ

されても，「まだまだ　ねむいもーん」と布団にもぐったままである。しかし母親が，「くーくん　おはよう」と声をかけて，頬をぺろぺろ舐めると，くーくんはぱっと目を覚ます。くーくんが「もっと　ぺろぺろして」と上機嫌で母親にねだると，母親は喜んで舐め回してくれる。くーくんにとって，母親は他の家族とは異なった感情を抱く，特別な存在であるようだ。

「お母さん絵本」という分類が可能なほど，母親への気持ちが前面に押し出された絵本は数多く存在している。先に紹介した『どれがぼくかわかる？』や『ぼくにげちゃうよ』等もこれに該当するだろう。母親と息子の深い絆は，長く読み継がれているものから新しいものまで，じつに多くの絵本に描かれている人気のテーマである。

おとうさんだいすき！

「ぼく，　とうさんの子どもで　うれしいよ」と，子どもに言わしめた父親がいる。『ねえ　とうさん』では，森に住むくまの子と，「くまらしい」堂々とした父親の交流が描かれる。くまの子は，大きな木を折って川に橋を架けるほど力強い父親の姿に，「すごい！」と目を丸くする。くまの子は父親のことが好きであると同時に，尊敬のまなざしを向けている。そして自分も「くまらしく　ならなくっちゃ　いけないんだ」と，父親を自らの理想像として掲げるのである。明確な理由はないが，ただ好きで，ただ安心するというのではなく，くまの子と一緒に父親の魅力を発見していくストーリー展開によって，読者は「すごい！」という感情を共有することができる。

先に紹介した作品では，『ぼく　ぼうしとらないぞ』，『うさこちゃんとうみ』等も，「お父さん絵本」と分類することが可能だろう。

まとめ

「お母さん絵本」に対して，「お父さん絵本」の数は多くはない。しかし，生き方の目標となり，尊敬されるような親は，少なくとも本調査では，父親のみしか見られなかった。「お母さん絵本」の母親は，無条件に子どもを愛し，そして愛されるといった，一定のパターンで描かれることがほとんどである。読者である子どもたちは，絵本の中の母親に自分の姿を重ね合わせながら読むことができるだろう。しかし，「お父さん絵本」ではそれぞれの父親の特徴が丁寧に描かれており，一人ひとりが個性的であるという印象を受けた。

5）子どもたちの冒険

母親のもとに帰り着く子どもたち

男の子の主人公は，豊かな想像力のもと活発に動き回るとさきに述べたが，いきいきと外の世界に飛び出していく主人公は，ほとんどの場合，家という現実世界に戻ってくる。そこでは母親が待っていることが多い。

２章で取り上げた『かいじゅうたちのいるところ』も，母親と口論になり，想像力を駆使して家を脱出してしまった主人公マックスが，「やさしい　だれかさん」の所へ帰りたいと思うようになる。マックスが部屋に戻ると，そこにはまだほかほかと温かい夕飯が用意されていた。夕飯を用意した人物も，「やさしい　だれかさん」も，誰とは明記されていないが母親だと分かる。

『ケンケンとびのけんちゃん』の主人公けんちゃんは，ケンケンとびしてどこかへ行くたび，いろいろな人になりきって帰ってくる。けんちゃんが帰ってくる家には，母親の姿しか見えない。ある日，けんちゃんは「ぼく，サーカスの　だんちょうさんに　なったよ」と言いながら帰宅し，公園に張ったテントでサーカスを始める。公演が終わると，けんちゃんはケンケンとびをしながら，サーカスを連れて次の町へと出発する。「さて，ケンケンとびの　けんちゃん，　こんどは　なにに　なって　かえってくるかしら？」と，けんちゃんがまた家に戻ってくることを示唆して，物語は締めくくられている。

『おせおせうばぐるま』，『めっきらもっきらどおんどん』等の作品でも，不思議な体験をしてきた男の子が，母親の登場をきっかけにすっと現実世界へと戻ってくる。母親は，子どもたちの空想世界と現実の世界を結ぶパイプ役を担っているようだ。

子どもを迎えに来る父親

空想世界と現実世界を仲介する父親が唯一登場したのは『もりのなか』である。森へ散歩に出掛

け，出会った動物たちとかくれんぼをして遊んでいた主人公の男の子を迎えに来たのは，スーツを着た父親であった。男の子が，動物たちとかくれんぼをしていると父親に話すと，父親は非現実的だと否定することも，無関心に聞き流すこともせず，「きっと，またこんどまで　まっててくれるよ」と優しく帰宅を促す。男の子は父親の肩車に乗って，森の外へと帰っていく。

まとめ

「絵本は主人公である子どもたちが安心して，基地のような父，母の元へと帰るもの」と神戸が述べているように，家族の元に帰り着く絵本はたいへん多く，本稿ではその一部しか紹介できなかった。特に，母親が基地である場合が多いようだ。現実に引き戻してくれる家族がいるからこそ，子どもは安心して想像の翼を広げられるのであろう。

6）親が活躍する絵本

母親が活躍する絵本

子どもの世話役にとどまらず，主体的に活躍する母親が登場する絵本がある。

『せんたくかあちゃん』は母親が主人公で，タイトルの通りかあちゃんが洗濯をする物語である。洗濯をする，家事をする母親が描かれることは珍しくないが，このかあちゃんはエネルギーに満ち溢れている。山のような洗濯物を洗っているうちに，家中のものをすべて洗いきってしまったかあちゃんは，イヌやネコ，下駄箱の靴や傘，子どもたちまでもたらいに放り込み，洗濯してしまう。へそを取りに来たかみなりさまも首をぐきっとつかまれて，たらいに放り込まれてしまう。かあちゃんに洗濯されたかみなりさまは，「いいおとこ」になって大満足。噂を聞いてたくさんのかみなりさまが空からやってくるが，かあちゃんは「よしきた　まかしときい」と力こぶを作って見せる。

『ペチューニアのだいりょこう』の主人公・がちょうのペチューニアも，６羽の子どもを持つ母親である。ペチューニアは，飛行機のように丘の向こうの世界へ飛んで行きたいと思ったが，太りすぎて飛べなくなっていた。美容体操によってダイエットに成功し，飛べるようになったペチューニアは小さな農場から飛び立つが，次第に家が恋しくなり，汽車に乗って家族の待つ村へと帰る。そして子どもたちに，大きな美しい都会のことを話して聞かせるのである。

かあちゃんもペチューニアも，子どもや家族のためというより，自らの興味に基づいて行動している。自分らしさを大切にしている，このようにエネルギッシュな母親はほとんどいないため，この２人は印象に残る母親であった。

父親が活躍する絵本

最後に，魅力的な父親が活躍する2冊の絵本を紹介したい。

１冊目は『ピッツァぼうや』である。主人公ピートは，雨で外に遊びに行けずに退屈している。見兼ねた父親は，ピートをピザに見立てて遊ぶことを思いつく。ピートをキッチンのテーブルに乗せ，生地（ピート）をこねたり，トッピングをする真似をしながら，想像力を働かせて遊ぶ父親はとてもユニークである。母親もこの遊びに参加するが，ピートに直接触れるのは主に父親であった。遊びを通して上機嫌になったピートは，雨がやむと，両親に見送られながら，元気に遊びに出かける。

２冊目は，40年以上の長きにわたって愛されている『だるまちゃんとてんぐちゃん』である。友人のてんぐちゃんの持ち物をうらやみ，あれが欲しい，これが欲しいと言う主人公だるまちゃんの要望に答えようと，父親の「おおきな　だるまどん」は家中を探し回るが，集めたものはだるまちゃんの理想からかけ離れたものばかり。一生懸命なのに，少しずれているだるまどんの姿がコミカルに描かれている。はな（鼻）が欲しいというだるまちゃんに花を用意してしまう，とんちんかんなだるまどんだが，情けないままでは終わらない。餅をつき，形を整えて，てんぐちゃんに負けないくらいの長くてりっぱな鼻を手作りしてくれる。これにはだるまちゃんも大喜びである。

父親は，子どもと一緒に遊ぶことが上手であると思う。子どもを楽しませることはもちろん，自分自身も楽しみながら子どもと接している印象を受けたのが，この2人の父親であった。

まとめ

これらの作品の母親像・父親像は一見新しい印

象を受けるが，2000年以降に出版された作品は『ペチューニアのだいりょこう』，『ピッツァぼうや』のみで，『せんたくかあちゃん』は1982年，『だるまちゃんとてんぐちゃん』は1967年に出版されており，現在親となっている世代が子どものころから読み継がれている。個性を発揮する親は，相対的に見て増えているとは言いがたいようである。

5．おわりに

近年，宮西達也や長谷川義史など，子育てを楽しんで行う父親の姿を当たり前に描く絵本作家が登場し，人気を得ている。『きょうはなんてうんがいいんだろう』（第30回講談社出版文化賞・絵本賞），『おまえうまそうだな』（第13回けんぶち絵本の里大賞）などで知られる宮西は，いきいきとした父親が登場する作品を次々に発表するだけでなく，自らも4児の子育てに積極的にかかわってきたようだ。宮西の持つ家族観がもっともあらわれている作品は，『おとうさんはウルトラマン』シリーズである。ウルトラマン一家は父親・母親・息子の三人家族で，父親の職業は悪者をやっつけるウルトラマン，母親は専業主婦である。ウルトラマンは一生懸命に戦う（仕事をする）だけでなく，家事を手伝うことも，子どもと遊ぶことも，当たり前のこととして行っている。時には失敗もするが，何事にも一生懸命に取り組むウルトラマンは，仕事も家庭も優劣をつけずに大切にしている。

また，宮西は自らの父親としての経験を『おとうさんはウルトラマン／おとうさんの育自書』にまとめている。以下のような語りかけから作品は始まる。

おとうさんになるって，
どういうこと？
子どもを育てるって，
どういうこと？
子どもにたくさんのお金をかけて
学力や教養をつけてやること。
子どもにいろいろなものを与えて
その子の可能性を
みつけてやること。
たしかにそれらも
大事なことかもしれない…
でも
ただただ，
子どもを抱きしめ，
子どもとともに
泣いたり笑ったりすること。
時には，
子どもをしかること。
そして，
言葉で愛してると
言うだけでなく，
心をつくして，
力をつくして，
背中で愛を見せることができたら
子どもは育っていく，
しっかりと育っていく。
そして，それは，
自分を育てることになる。
おとうさんはそうやって
おとうさんになっていく。

このように，子どもを抱きしめる父親，心と力を尽くして子どもを愛する父親の登場する絵本は，母親と比較するとはるかに少ない。子育てを通して自分を育て，「おかあさんになっていく」女性キャラクターが当たり前に描かれている一方，「おとうさんになっていく」男性キャラクターは，まだ少数である。しかし，少しずつではあるが，これから長く読み継がれていくであろう絵本の中に，確実に根を下ろし始めているように思う。

『おとうさんはウルトラマン』シリーズだけではない。同じく宮西の『おとうさん・パパ・おとうちゃん』は，父親の家庭での姿と，仕事をする姿が順番に描かれた絵本である。たとえば，掃除機をかけている「おとうさん」は，職場に行くと「げんばかんとく」と呼ばれ，部下に指示を出している。ミミズを怖がる「おとうちゃん」の職業は，「チャンピオン」と呼ばれる最強のボクサーである。仕事で家を空けたままの父親ばかりではなく，仕事も家族のどちらも楽しむ父親の姿が，ごく自然に描かれるようになってきている。

では，母親はどうだろうか。子どもを抱きしめ，

心と力を尽くして子どもを愛する母親は，すぐに見つけることができる。しかし，仕事をしているなど，家庭外での役割を持った母親は，新しい作品にもほとんど登場しない。筆者がすぐに思い浮かべることができたのは，『おかあさん，げんきですか。』のみであった。

『おかあさん，げんきですか。』は，母子家庭の男の子が母親に宛てて書いた，語り口調の手紙が本文となっている。「パッパッパッとしょくじのよういをして，　グワラグワラとせんたくして，『わすれものないの？』　とか，ぼくにわあわあいって，カッカッカッと　ハイヒールをならして風のように会社にいく」母親への手紙に，男の子は「あんまり　がんばらないでください」と書き添える。この描写から，家事も仕事もこなす母親の忙しさが伝わり，仕事をする母親は大変であると印象付けられる。母親が職業を持つことは自然なことではなく，大変なことであるという考え方が，今もなお定着しているようである。

現在，子どもたちに与えられている絵本は，性別役割分担に基づいたキャラクターが登場するものがまだ大半を占めている。今までに見られなかった特徴を持つキャラクターも登場してきているが，少数である。近年，男は仕事という考え方のみにとらわれない父親が活躍する場が増えてきたように思うが，　絵本における父親の登場割合はまだ高いとはいえない。そして母親は，女は家庭という役割に従順であり続けている。

もちろん，専業主婦を否定するわけではない。仕事に情熱を注ぐ父親も悪いわけではない。しかし，それだけではいけないと思う。絵本の主人公はもちろん，その親も，子どもたちが将来の自分を思い描くときの理想像となりうる。性別役割分担にとらわれない，個性的なキャラクターが増えれば，子どもたちの選択肢も広がる。多様な個性を持ったキャラクターがごく自然に描かれる，そのような意味での「よい絵本」が次世代のスタンダードとなることを期待すると同時に，今後も絵本とのかかわりを持ち続けるであろう筆者自身も，固定観念にとらわれない，広い視野を持った絵本選びを心がけたいと思う。

参考文献

加賀原由佳　「絵本に描かれる母親像・父親像～『第23回よい絵本』から分析する～」『おおしま絵本文化』第14号　71-76　（財）射水市絵本文化振興財団　2008。

神戸洋子　「絵本にみる親子関係の変化―林明子から島田ゆか，酒井駒子へ―」『第60回大会発表論文集』 986-987　日本保育学会　2007。

黒田廣美　「女性と職業（性別役割分担について）―幼児期における絵本童話の影響―」『聖和大学論集』第25号　41-50　聖和大学　1997。

佐々木宏子　「『絵本データベース』から見えてきたこと」『こどもの図書館』vol.50　no.1　2-5　児童図書館研究会　2003。

全国学校図書館協議会編　『第23回　よい絵本』　全国学校図書館協議会　2005。

全国学校図書館協議会編　『第24回　よい絵本』　全国学校図書館協議会　2008。

武田京子　『絵本論』　ななみ書房　2006。

特定非営利活動法人シーン編　『2002年度高槻市男女共同参画に関する活動補助金助成事業「絵本100冊読んで見えてきたもの」』　特定非営利活動法人シーン　2003。

日本子どもの本研究会絵本研究部編　『えほん子どものための500冊』　一声社　1989。

日本子どもの本研究会絵本研究部編　『えほん子どものための300冊』　一声社　2004。

Pooka編集部編　『Pooka+　酒井駒子　小さな世界』　学習研究社　2008。

藤枝澪子　「絵本にみる女（の子）像・男（の子）像」『講座主婦』第1巻　148-174　汐文社　1983。

藤田由美子　「子ども向けマス・メディアに描かれたジェンダー」『九州保健福祉大学研究紀要』4　259-268　九州保健福祉大学　2003。

宮西達也　『おとうさんはウルトラマン／おとうさんの育自書』　学習研究社　2005。

紹介・引用した絵本

イギリス昔話　瀬田貞二訳　山田三郎画　『三びきのこぶた』　福音館書店　1967。

石亀泰郎　『イエペはぼうしがだいすき』　文化

出版局　1978。
岩崎ちひろ絵・文　武市八十雄案　『あめのひのおるすばん』　至光社　1968。
シャーロット・ヴォーク作　竹下文子訳　『でんしゃがくるよ！』　偕成社　1998。
内田麟太郎作　みやざきひろかず絵　『おはようぺろぺろ』　金の星社　2001。
マリー・ホール・エッツ文・絵　まさきるりこ訳　『もりのなか』　福音館書店　1963。
太田大八作・絵　『かさ』　文研出版　1975。
ジュディス・カー作　晴海耕平訳　『おちゃのじかんにきたとら』　童話館出版　1994。
かこさとし　『からすのパンやさん』　偕成社　1973。
加古里子　『だるまちゃんとてんぐちゃん』　福音館書店　1967。
カーラ＝カスキン文・絵　よだしずか訳　『どれがぼくかわかる？』　偕成社　1970。
角野栄子作　大島妙子絵　『ケンケンとびのけんちゃん』　あかね書房　1995。
角野栄子作　牧野鈴子絵　『おはいんなさいえりまきに』　金の星社　1984。
かんざわとしこ文　にしまきかやこ絵　『はけたよ　はけたよ』　偕成社　1970。
ミッシェル・ゲ作・絵　かわぐちけいこ訳　『おせおせうばぐるま』　福音館書店　1985。
後藤竜二作　武田美穂絵　『おかあさん，げんきですか。』　ポプラ社　2006。
酒井駒子　『ぼく　おかあさんのこと…』　文溪堂　2000。
酒井駒子　『よるくま』　白泉社　1999。
さとうわきこ作・絵　『せんたくかあちゃん』　福音館書店　1982。
佐野洋子　『ねえ　とうさん』　小学館　2001。
しみずみちを作　山本まつ子絵　『はじめてのおるすばん』　岩崎書店　1972。
しみずみちを作　長谷川知子絵　『ぼく　ぼうしとらないぞ』　国土社　1987。
デイビッド・シャノン作　小川仁央訳　『だめよ，デイビッド！』　評論社　2001。
ウィリアム・スタイグ作　木坂涼訳　『ピッツァぼうや』　セーラー出版　2000。
モーリス・センダック作　じんぐうてるお訳　『かいじゅうたちのいるところ』　冨山房　1975。
筒井頼子作　林明子絵　『いもうとのにゅういん』　福音館書店　1987。
ロジャー・デュボワザン作　まつおかきょうこ訳　『ペチューニアのだいりょこう』　冨山房　2002。
なかえよしを作　上野紀子絵　『ねずみくんのチョッキ』　ポプラ社　1974。
なかがわちひろ作　『天使のかいかた』　理論社　2002。
なかがわりえことおおむらえりこ　『ぐりとぐら』　福音館書店　1967。
長野ヒデ子作　『せとうちたいこさんデパートいきタイ』　童心社　1995 。
にしまきかやこ絵・文　『ふんふんなんだかいいにおい』　こぐま社　1977。
長谷川摂子作　ふりやなな画　『めっきらもっきらどおんどん』　福音館書店　1985。
藤本堅二作　『じどうしゃにのった』　福音館書店　1984。
マーガレット・W・ブラウン文　クレメント・ハード絵　いわたみみ訳　『ぼくにげちゃうよ』　ほるぷ出版　1976。
マージョリー・フラック文　マージョリー・フラック，大沢昌助絵　光吉夏弥訳　『おかあさんだいすき』　岩崎書店　1954。
ジャン・ド・ブリュノフ作　やがわすみこ訳　『ぞうのババール』　評論社　1974。
ディック・ブルーナ文・絵　石井桃子訳　『うさこちゃんとうみ』　福音館書店　1964。
ロバート・マックロスキー文・絵　石井桃子訳　『サリーのこけももつみ』　岩波書店　1986。
みやにしたつや作・絵　『おとうさんはウルトラマン』　学習研究社　1996。
みやにしたつや作・絵　『おとうさん・パパ・おとうちゃん』　鈴木出版　1996。
宮西達也作・絵　『おまえうまそうだな』　ポプラ社　2003。
宮西達也作・絵　『きょうはなんてうんがいいんだろう』　鈴木出版　1998。
もとしたいづみ文　石井聖岳絵　『ふってきました』　講談社　2007。

アンドレア・ユーレン作　千葉茂樹訳　『メアリー・スミス』　光村教育図書　2004。
ロブ・ルイス作　ふなとよしこ訳　『はじめてのふゆ』　ほるぷ出版　1992。
わかやまけん　『しろくまちゃんのほっとけーき』　こぐま社　1972。